

日本語会話文の 音変化に関する 理解と教育の効 果について – 中 国人ビジネス従 事者の場合 –

松澤隆志

国際商業機器科技(深圳)
有限公司

Takashi Matsuzawa

IBM Solution and Services
(Shenzhen) Co., Ltd.

Comprehension of Japanese sound changes and the effectiveness of instruction: A case study in the Chinese business context

Reference data:

Matsuzawa, T. (2011). *Nihongo kaiwabun no onhenka ni kansuru rikai to kyooiku no kooka ni tsuite: Chuugokujin bijinesu juujisha no baai* [Comprehension of Japanese sound changes and the effectiveness of instruction: A case study in the Chinese business context]. In A. Stewart (Ed.), *JALT2010 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

There have been arguments that sound changes of spoken Japanese hinder the listening comprehension of Japanese-language learners. This study was conducted on Chinese business people who use Japanese for business, to investigate to what extent sound changes of spoken Japanese diminish understanding and if explicit teaching of sound changes could improve their listening comprehension. This study used the categorization of sound changes into four parts: *palatalization*, *nasalization*, *consonant gemination*, and *elision*. It turned out that participants in this study had an initial correct comprehension of sound changes of 22.07% on average, after instruction, it improved to 52.57%, and one month later, it retained the level of 48.71%. As a result, we can conclude that the listening comprehension of Japanese sound changes by Chinese business people is weak and explicit teaching of the sound changes can improve the situation.

日本語の会話文には多くの音変化(縮約形)が存在し、日本語学習者の聴解の妨げになっていることが指摘されている。本論文は、中国で日本語をビジネスで使用している人達を対象に、音変化を拗音化、撥音化、促音化、音の脱落に分け、その理解度を調査するとともに、音変化を明示的に指導することは理解度を向上させるかどうかについて研究したものである。結果としては、当初、音変化の理解度が平均22.07%だったが、授業後は52.57%に向上した。また、1ヵ月後の理解度の平均は48.71%だった。この結果から、仕事で日本語を使用している人であっても音変化の理解度は低いこと、音変化の教育は効果があることが確認された。

はじめに

本稿は、中国において日本語を使用してビジネスに携わる人達を対象に、日本語会話文の音変化の理解度の現状と、明示的な指導によって理解度が向上するかどうかについて研究したものである。近年、日本のITサービスを海外から実施するという動きが加速しているが、前提として日本語による意思の疎通が必要となる。他方、日本語の音変化が日本語使用者の聴解の妨げになっているという指摘があるが、音変化の理解度に関しての研究は日本にいる日本語学習者を対象にしたものが多く、海外で日本語を実践で使う人達を対象にした研究はほとんど見られない。もし、日本語使用者の実践における音変化理解度の実態や教育の効果が明らかになれば、音変化の教育に貢献できる可能性がある。



会話文の音変化は一般的に縮約形として扱われているが、本稿では学習者が発生する現象を連想できるように音変化と表現することにする。また、川瀬(1992)の音変化の分類に準じて、拗音化、撥音化、促音化、音の脱落を対象としている。

先行研究

縮約形の定義に関しては、斉藤(1991)の定義した、縮約形とは音変化において音節数の減少、音数の減少あるいは音量の減少したものである、が広く参照されている(東, 2009; 峰岸, 1999; 福島・上原, 2004ほか)。一方、福島・上原は、音変化が原形より長くなるもの(例えば、「と」→「って」)に関しては拡張形と呼んでいる。斉藤(1991)は縮約にならない音変化については「話し言葉形」あるいは「インフォーマル形」と呼ぶことを提案している。

川瀬(1992)は縮約表現の文法的側面を論じ、その中で、縮約形の形態を本研究で扱う4種に加えて、半母音化、「い」音化、その他の音変化、の7種類に分類している。Hasegawa(2006)は、casual speechとfast speechによって発生する音変化は異なるとし、社会的な要素(地位、年齢、性別等)と他の文法的な要素(例えば、私と俺の選択)によって影響されると述べている。Toda(2006)は日本語の縮約形を、音声学的な視点から、音の脱落、短縮(拗音化等)、同化(撥音化等)、変換(短母音の長母音化等)の4種類について解説し、Focus on formで教育することを提唱している。

土岐(1975)はテレビの教養番組の分析から、縮約形が使われるのはインフォーマルな場面に限らないこと、また、話す速度に必ずしも関連しないことを指摘した。堀口(1989)は、13の音声マスメディアを調査し、全体の52%で縮約形が使われているとの結果を踏まえ、個々の縮約形について、教育の要否について提案している。峯岸(1999)は、縮約形を外国人学習者が使用した場合の日本語母語話者の受けとりかたを調査し、会話を含めて指導すべき縮約形から聴解に留めるべきもの等の提案をしている。東(2006, 2008, 2009)は中国人話者においては、縮約形は一部の高級話者以外はあまり使っていないが、自然な日本語を学びたいという強い要望があることを論じている。また、中国においては縮約形はほとんど教育されていない実態を紹介している。これらの先行研究の中には、海外の日本語使用者に関する音変化の理解度と教育効果について論じているものは見当たらなかった。

本研究の目的と枠組み

研究調査事項

本研究は、

1. 中国人ビジネス日本語使用者の会話文における音変化の理解度はどの程度か
2. 中国人ビジネス日本語使用者に音変化の明示的な指導をすることは効果があるか
3. 音変化の 카테고리において、特に理解度が低いカテゴリーはあるかを明らかにすることを目的とする。

研究調査方法

調査対象

本研究は、著者が勤務する会社において、音変化をワークショップの1モジュールとして授業することで行った*1。ワークショップは3モジュールで構成され、1日3時間ずつ、2日間に分けて実施した。4ヶ月間に計6回開催し、参加した84名のうち、全課程を終了した社員、70名を調査対象とした(以後、対象者)。内訳は、女性52名、男性18名であり、うち49名が日本語能力試験(JLPT)1級に、11名が2級に、1名が3級に合格している。年齢は20歳代が64名、30歳代6名である。日本語学習歴は平均3.57年である。対象者と日本語との関わりは、指示書等の文献を読むのみ、あるいは加えて電子メールによるやりとりをする人が大勢を占め、電話会議等で定期的に日本人と会話するチャンスがある人は少数である。

研究調査データ収集方法

データの把握には著者が作成した音変化の理解度テストを用いた。理解度テストは、授業前テスト(以後、プリテスト)、授業後テスト(以後、ポストテスト)、1ヵ月後テスト(実際は31日後から40日後の間で実施。以後、保持テスト)と3回行った。内容は音変化を含む短い文を音変化の4つのカテゴリごとと5問ずつ、計20問作成し、それを1セットとしたものを3セット作成し(合計60問)、筆者を含む3人の日本語母語話者が録音した(これを例文1、2、3と呼ぶ。付録1参照)。録音は、各問題の間に10秒間隔が空いており、その間に、対象者は印刷されている文章のカッコで囲まれた空欄に聞き取った音変化の変化前の形を記入する。

(例) 自分で(見りゃ)いいじゃない。正解: みれば

統制条件のグループはおかず、毎回、受講者を無作為にAとBのグループに分け、授業前と後に、それぞれ異なる例文を聞かせるカウンターバランス



によるプリテスト・ポストテスト方式を採用した。また、保持テストは別の例文で行った。なお、例文1, 2, 3はワークショップの開催ごとに順繰りに入れ替えた。

音変化の明示的な指導としてプリテスト後、拗音化、撥音化、促音化、音の脱落の順に日本語で授業を行った(採用した音変化については付録2を参照)。時間は、音変化の種類が多い拗音化に1時間、その他は30分を目安とした。通常、拗音化と撥音化の授業がワークショップの初日、促音化と音の脱落は2日目となった。(ワークショップは中1日開けて行うケースが標準である。)

内容は、まず各カテゴリーの主な音変化の種類とその変化ルールについての講義を行った。その後、演習として、音変化を含む短い文章を筆者が発話し、対象者が答案の解答欄のカッコ内に変化する前の形を書くという聞き取り(テストと同形式である)と、資料に印刷された音変化前の文章を読んで、どこが音変化する可能性があるかを予測して下線を引き、音変化をカッコの中に記入する、の2種類を実施した。

(予測の例) 私が取てあげる。(とったげる)

聞き取り演習は理解し易いように類似の音変化を連続して発話し、予測する演習では、連想で解答が分からないようにそれらの文章を無作為に配置した。

収集データ分析方法

各テストの解答はひらがなで良いとしたが、漢字で記入した場合は、文章を正しく聞き取ったと判断し、使用した漢字ならびに送り仮名も正しいものだけを正解とした。研究調査事項1に関してはプリテストにおける正答率を用いて評価した。調査事項2に関しては、プリテストとポストテストを分散分析(ANOVA)で分析した。更にポストテストの結果が1ヵ月後も保持されるかどうかを検討するため、プリテストと保持テスト、ポストテストと保持テストに関しても分散分析により分析した。調査事項3に関しては、各プリテスト、ポストテスト、保持テストにおいて、音変化のカテゴリー間の正解率を分散分析で分析した。

結果

中国人ビジネス日本語使用者の会話文の音変化の理解度(正解率)を表1に示す。以前述べたように問題は20問ある。

表1 音変化の理解度テスト: プリテスト、ポストテスト、保持テスト

	プリテスト	ポストテスト	保持テスト
サンプル数	70	70	70
平均値	4.41	10.51	9.74
標準偏差	3.26	5.05	5.37
パーセント表示	22.07%	52.57%	48.71%

プリテストの結果が示すように研究調査事項1、音変化の理解度(正答率)は平均4.41(22.07%)と低かった。研究調査事項2の結果は、分散分析で検定したところ有意であった($F(2,138) = 57.36, p < .01$)。更にLSD法による多重比較では、プリテスト対ポストテスト、プリテスト対保持テストの差が有意であった。一方、ポストテスト対保持テストは有意ではなかった($MSe = 13.46, p < .05$)。従って、音変化の授業は効果があり、かつ1ヵ月後も持続したと判断できる。

続いて、研究調査事項3に関して、4つの音変化のカテゴリーごとの理解度の差をプリテスト、ポストテストと保持テストについて分析した。結果を表2、3に示す。各カテゴリーに5問が配置されている。

表2 音変化のカテゴリーごとの理解度: プリテスト

	拗音化	撥音化	促音化	音の脱落
サンプル数	70	70	70	70
平均値	0.76	1.49	1.06	1.11
標準偏差	1.07	1.16	1.25	1.14
パーセント表示	15.14%	29.71%	21.14%	22.29%

プリテストの結果の4カテゴリーを分散分析で検定したところ有意であった($F(3, 276) = 4.61, p < .01$)。更にLSD法で多重比較したところ、拗音化対撥音化で理解度の差が有意であったが、それ以外の比較では有意な組み合わせはなかった($MSe = 1.36, p < .05$)。プリテストの結果からは拗音化の理解度は撥音化に比べて低いという結果が出た。

表3 音変化の категорияごとの理解度: ポストテスト

	拗音化	撥音化	促音化	音の脱落
サンプル数	70	70	70	70
平均値	2.20	2.69	2.63	3.00
標準偏差	1.47	1.42	1.43	1.56
パーセント表示	44.00%	53.71%	52.57%	60.00%

次に、ポストテストの結果について分散分析で検定したところ有意であった ($F(3, 276) = 3.46, p < .05$)。更にLSD法で多重比較したところ、拗音化対音の脱落で理解度の差が有意であったが、それ以外の比較では有意な組み合わせはなかった ($MSe = 2.19, p < .05$)。ポストテストでは拗音化は音の脱落より理解度が低いという結果が出た。一方、保持テストの結果を分散分析で検定したところ、 $F(3, 276) = 1.26, p > .10$ で有意な理解度の差はなかった(表は省略)。プリテスト、ポストテストと保持テストで結果が異なったため明確な結論は出なかった。

最後に、ワークショップを開始した後、例文1と例文3に重複する音変化が2つ入っていることが分かった(例文1問題2と例文3問題6、例文1問題3と例文3問題15)。これについては問題の変更・録音のやり直しはせず、全てのデータを集計した時点で、プリテスト・ポストテストで同じ音変化を解答した群と、ポストテストで初めて解答した群の回答の差を直接確率計算法で検定した。結果を表4に示す。

表4 重複例文の影響調査

音変化	例文 前後	N	正答数	偶然生起確率
「わたしんです」	(1-2) → (3-6)	14	11	$p = .204$ (両側検定)
	なし → (3-6)	10	5	
	(3-6) → (1-2)	14	8	$p = .428$ (両側検定)
	なし → (1-2)	11	4	
「あっち」	(1-3) → (3-15)	14	9	$p = .653$ (両側検定)
	なし → (3-15)	10	8	
	(3-15) → (1-3)	14	9	$p = .180$ (両側検定)
	なし → (1-3)	11	10	

上記のように両側検定で、プリテスト・ポストテストで同じ音変化を解答したグループと初めて解答したグループとの結果の差は $p = .05$ の水準で有意ではなかった。結果、問題の重複による影響は無いと判断した。

考察

授業前の中国人ビジネス日本語使用者の音変化の理解度は、22.07%に留まった。また、授業の結果、理解度が2倍以上の52.57%に有意に上昇したことから判断して、音変化の授業は効果が有ったと言える。更に、1ヵ月後の保持テストにおいても理解度は48.71%であり、有意な低下は見られなかった。本研究の結論としては、中国における日本語使用者の音変化の理解度は低く、受講者の70.00%がJLPT1級試験に合格している上級日本語使用者であることを考えると、東(2009)が指摘するように中国では音変化の教育は効果が出るほどには行われていないと判断できる。また、合計3時間にも満たない授業で理解度が向上し、かつ1ヵ月後も維持されたことを考えると日本語の音変化に関しては積極的に教育するのが妥当な判断であると思われる。

一方、筆者はワークショップ終了時にアンケートを実施しているが、それによると59名、84.29%は音変化の存在を知っていると答えしており、どこで知ったかという質問に対し、37名が学校で、と回答している。これまた、東(2009)が報告している、中国では音変化は文法項目として紹介されている、を裏付けている。すなわち紹介を実践に向けた授業に拡大することが望まれる。

音変化の category に理解度の差はあるかについて検討したい。プリテストでは、拗音化と撥音化の理解度に有意な差があった。ポストテストでは、拗音化と音の脱落の理解度に有意な差があった。これらの結果は、拗音化に関しては他の音変化より理解度が低いことを示唆している。ただ、拗音化する変化の種類は、当授業では10項目解説しているが、他の音変化に比べて多く、習得に時間がかかることも考えられる。一方で、保持テストにおいては理解度に有意な差がある category の組み合わせは無いことを考慮すると結論は急ぐべきではないであろう。

次いで、テスト例文の適切さを検証するために、各音変化 category について、理解度が低かった例文を保持テストから2例ずつ取り出して検討したい。(表5参照)

表5 理解度が特に低かった例文(保持テストより)

カテゴリー	例文ID	例文	理解度%
拗音化	1-1	場所は駅に(着きゃ)分るよ。	19.05
	1-9	むずかしいから彼に(できゃ)しないよ。	
	3-9	広告は(捨てちゃった)。	
撥音化	2-2	(そこん)とこ何とかお願い。	32.14
	3-10	これは人には(借りらんない)ものですよね。	4.76
促音化	3-11	この辺に(ドレミって)言う店ありませんか。	9.52
	2-19	本当かな。屋根が(吹っ飛んだ)というの。	7.14
音の脱落	1-20	料理を(作って)くよ。	14.29
	3-16	ちょっと(見上げて)くれるかな。	
	2-4	その映画、今度テレビで(観れる)わよ。	

撥音化の、「これは人には借りらんないものですよね」は理解度4.76%だった。元の動詞「借りられない」が可能形の否定で、聞き慣れなかった可能性がある。促音化の、「本当かな。屋根が吹っ飛んだというの」は理解度7.14%だった。「吹く」と「飛ぶ」の複合動詞が聞き取れなかったと考えられる。ちなみにこの二つの例文は演習の中に出てくる。

「この辺にドレミって言う店ありませんか」は理解度9.52%だった。「ドレミ」という単語になじみがなかった可能性が高い。いずれにしろ、これら3つの文は、聴解力以外の要素が働いた可能性が考えられ、理解度が低めに出了た可能性が有る。なお、理解度10.71%の、「その映画、今度テレビで観れるわよ」に関しては、録音した女性の「れ」の発音が少し弱く、「みえる」と聞こえないこともなかった。そのため「みえる」という誤解答が結構有った。音変化しているという認識を働かす前に「テレビでみえる」で意味を捉え、そのまま記入してしまった可能性がある。意味は取れているが、音変化の理解度測定という視点では、録音をし直すのが良かったと判断される。

最後に、音の省略の例文の中には「ら抜き」言葉が3例あった。「食べれる」、「観れる」(上述)、「来れる」である。理解度はそれぞれ、76.19%、10.71%、53.57%であった。「ら抜き」言葉を音変化の形としてではなく、そのまま理解できているということも考えられるが、作文で「ら抜き」言葉をそのまま書いてしまう可能性もあるので、音変化の教育をする際には「ら抜き」言葉も加える必要があると考えられる。

おわりに

本研究により、日本語を使用してビジネスに携わる人たちの音変化に関する理解度はかなり低いことが、授業をすることにより大幅に向上させることが可能であるという事例を提供できた。研究を実施した深圳は、移住者都市と呼ばれ、広東省にありながら共通語(Mandarin)が主に話されており(Shenzhen Government Online, n.d.)、結果は、中国においてはとて言い換えてもあながち問題は無いと考える。教育の時期に関しては、実践で日本語を使用する人達に効果があったことから、遅きに失するということはない。しかし、理解度が50%前後に留まっていることを考えると更に時間をかけた教育が望まれる。

今後の課題としては、音変化の聴解教育はどの音変化カテゴリー・変化まで教えるのがもっとも効果的、効率的かということの研究していく必要がある。そのためには中国を含む諸外国における現状把握が必要になるだろう。また、延長線上の議論として音変化を発話の教育の中にどう取り入れていくか、その効果はどうかということも研究していく必要がある。

注

1) 当ワークショップは「日本語テレコンファレンス・ワークショップ」と言い、a) 日本語会話文における音変化(ボトムアップ・プロセス対策)、b) ビジネステレコンファレンスでの注意点(トップダウン・プロセス対策)、c) 電話会議のための会話ストラテジー、の3モジュールから構成されている。

謝辞

草稿に対し貴重なご意見をいただいたJSL SIGの川手・ミヤジエイエフスカ恩先生と神田みなみ先生に御礼申し上げます。また、例文を録音してくれた高見栄三、松澤美恵子の両氏に感謝いたします。

Bio data

Takashi Matsuzawa is a retired business person and currently teaches Japanese in Shenzhen, China. His research interest lies in common issues of practical Japanese. <matsuzaw@siren.ocn.ne.jp>

引用文献

- 川瀬生郎(1992)「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学 留学生センター紀要』第2号、1-24.
- 斉藤純男(1991)「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』第6号、89-97.
- 東会娟(2006)「会話コーパスに見る中国人日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』第7号、51-66.
- 東会娟(2008)「中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』第9号、343-356.
- 東会娟(2009)「中国の大学日本語教育における縮約形の指導について」『言葉と文化』第10号、151-164.
- 土岐哲(1975)「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』第28号、55-66.
- 福島悦子・上原聡(2004)「丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察—日本語の母語話者と学習者の会話を比較して—」『東北大学大学院国際文化研究科論集』第12号、121-130.
- 堀口純子(1989)「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文芸言語研究. 言語篇』第15号、99-121.
- 峯岸玲子(1999)「日本語学習者への縮約形指導のめやす—日本人による評価と使用率をふまえて—」『日本語教育』第102号、30-39.
- Hasegawa, N. (2006). On casual speech: How it differs from fast speech. In J. D. Brown & K. Kondo-Brown (Eds.), *Perspectives on teaching connected speech to second language speakers* (pp. 169-187). Honolulu: University of Hawai'i.
- Shenzhen Government Online. (n.d.) *Overview*. Retrieved from <http://english.sz.gov.cn/gi/201008/t20100805_1557550.htm>.
- Toda, T. (2006). Focus on form in teaching connected speech. In J. D. Brown & K. Kondo-Brown (Eds.), *Perspectives on teaching connected speech to second language speakers* (pp. 189-205). Honolulu: University of Hawai'i.

付録1 例文1の内容

1. 場所は、駅に(つきゃ = 着けば)分かるよ。
2. あ、それ(わたしん = 私の)です。
3. 駅は (あっち = あちら)のほうですよ。
4. 今(やってる = やっている)とこ。
5. 先に(いっちゃう = 行ってしまう)よ。
6. そう簡単に(きめらんない = 決められない)よ。
7. これ、よごれているから(とっかえて = 取り替えて)くれませんか。
8. かわりに (やったげ = やってあげ)ようか。
9. むずかしいから彼に (できゃ = できは)しないよ。
10. この単語、(しんない = 知らない)?
11. (これって = これは)いくらですか。
12. 明日までに(やつといて = やっておいて)ね。
13. そんなに(のんじゃ = 飲んだら)体にわるいよ。
14. これが(あいつんち = あいつの家)だよ。
15. 私は (たなかって = 田中と)言います。
16. この草は(たべれる = 食べられる)よ。
17. (なんちゅう = 何という)ことしてくれたの。
18. 本当に(みたん = 見たの)だ。
19. (こっち = こちら)のほうだよ。
20. 料理を(つくってく = 作っていく)よ。

付録2 授業で採用した音変化

音変化		元の形、条件	音変化後
拗音化	1	eば、iはしない(動詞)	iや(i, e: い段、え段のこと)
	2	あれは、これは、それは	ありゃ、こりゃ、そりゃ
	3	(動詞) + なくては、 (形容詞) + くては	なくちゃ くちゃ
	4	(動詞) + なければ (形容詞) + ければ	なけりゃ、なきゃ けりゃ、きゃ
	5	ことだ	こっちゃ
	6	だら(動詞た形)	じゃ
	7	てしま(動詞て形) でしま(動詞て形)	ちゃ じゃ
	8	ては(動詞て形)	ちゃ
	9	では	じゃ
	10	という	ちゅう、っちゅう
撥音化	1	の(助詞)、のです	ん、んです
	2	のうち(家)	んち
	3	ら、り、れ+ない(動詞)	んない
促音化	1	i(複合動詞)	っ(i: い段のこと)
	2	あちら、こちら、そちら、 どちら	あっち、こっち、そっち、 どっち
	3	見つ(ける/かる)(動詞)	みっ、めっ
	4	(名詞) + と、という	って
	5	(名詞) + は(注)	って
	6	ことだ	こった (cf. こっちゃ)
音の脱落	1	て(動詞て形) + あげる	たげる(e抜き)
	2	(動詞て形) + いる/いく (い抜き)	(動詞て形) + る/く
	3	(動詞て形) + おく (e抜き)	とく
	4	られる (グループ2, 3 動詞 可能形)	れる(ら抜き)

(注)この変化は「は」が音変化して「って」になったものではなく代替として使われるようになったものと考えられる。「って」について斉藤(1991)は「とて」が由来らしいと説明している。